

【OpenSEA ポスター発表(1)】

アーティストではない民衆が街頭で行うアート・アクティヴィズム

下岡 麻美

(大阪大学大学院連合小児発達学研究科研究生)

2024 年は、タイにアートという概念が輸入されて 100 年になる年である。1924 年、イタリア人彫刻家コッラード・フェローチらが、アートを「アーティスト」が美術館やギャラリーに飾ることをタイ人に広めた。

2020 年のタイ国王による軍の私物化についての抗議デモでは、警察からの放水や催涙弾を受けたときに、黄色いアヒルの浮き輪やゴムボートがデモ参加者を守ったとして、王室改革の象徴となった。黄色いアヒルの浮き輪をデモ隊で投げ合ったり、黄色いアヒルのゴムボートを放水や催涙弾の盾代わりに使ったりした。2020 年以降は、タブー視されてきた王室改革に切り込んで、アート・アクティビズムを SNS で拡散している。

2010 年代以降のタイでは、「アーティスト」だけがアートを用いるのではなく、アートの専門家ではない「民衆」が平和的で創造的なアートをインタラクティブに用いて、社会的公正を求める共感者を増やす様相が見られる。

【OpenSEA ポスター発表(2)・ライトニングトーク(1)】

洪水後の水系感染症罹患における行動要因について
2020 年洪水、西ジャカルタを事例に

多嶋 花帆
(東京大学 博士課程)

ジャカルタでは、近年、洪水被害が増加している。気候変動の影響を受け、将来的な洪水後の感染症被害も増加すると予測されている。都市における健康リスクの予測のため、疫学的アプローチと環境工学的な計算方法を統合したモデルを新しく構築する必要がある。人々の行動や生活様式、多様な水利用状況は、感染症の流行に大きな影響を与える可能性があるものの、それらの行動要因を考慮した研究はほとんど行われていない。

本研究では、質問票調査と統計分析によって、被災地域の水利用状況と洪水後の感染症罹患状況を示し、洪水後の水系感染症罹患の要因となりうる行動や状態について明らかにした。井戸を保護している世帯、水道を契約している世帯、WASH（Water, Sanitation and Hygiene：公衆衛生の概念）を認知している世帯は洪水後、水系感染症に罹患しづらく、避難した世帯、世帯主が中卒である世帯、Rawa Buaya 地区に住んでいる世帯、お祈りする世帯、世帯構成員に 5 歳未満児が含まれる世帯は感染症に罹患しやすかった。

【OpenSEA ポスター発表(3)】

バリ島における合同火葬式の儀礼的完全性と宗教的・社会的意義

白井 諒

(同志社大学グローバル地域文化学部 3 年)

合同火葬式は、個人の魂を適切な場所へ送り出すと同時に、村全体の結束を強化する重要な宗教儀礼である〔鏡味 2005〕。しかし、近年のバリ島では経済発展に伴い就労人口が増加する中、時間的な負担が大きいこの儀礼をどのように維持していくかが課題となっている。

本研究では、インドネシア・バリ島クルンクン県 T 村における合同火葬式の宗教的・社会的意義について、現代の村人がどのように認識し、実践しているかに着目して考察することを目的とする。

2024 年 8 月から 9 月に実施したフィールドワークで、儀式の完全性を保つために村全体が協力し、外部の業者に頼らない傾向が明らかになった。また、魂の浄化と来世への準備という宗教的意義を重視し、時間的な負担が大きい儀式を受け継いでいることも確認された。本発表では、合同火葬式が村人にとってどのような意味を持ち、いかに継承されているかを報告する。

(参考文献)

鏡味治也 2005 「共同体性の近代—バリ島の火葬儀礼の実施体制の変化から考える」 『文化人類学』第 69 巻第 4 号, pp. 540-555

【OpenSEA ポスター発表(4)】

地元で仕事を創出し家族とともに暮らすための実践知の言語化
ミンダナオ島北部地域の事例

金井 貴佳子
(慶應義塾大学 博士課程)

フィリピンでは、その1割の人々が出稼ぎ労働者として海外へ行く。特に女性が出稼ぎに行くことが多く残された家族は彼らの送金により生活水準は向上する一方、家庭環境が崩壊することも少なくない。本研究の目的は、国内で仕事を創出し、家族とともに暮らしながら生計を立てるための実践知を言語化することである。調査は、ミンダナオ島北部カガヤンデオロ市およびヒンゴオグ市にて、充実感を持って仕事に取り組み生計を立て家族とともに暮らしている方々20名にインタビューを行った。インタビューで得られたことをもとに、実践の経験則を体系化し言語化する方法であるパターン・ランゲージとしてまとめた。結果、家族以外の人とのサポートシステムも築くこと、今の仕事が天命だと思える出来事を思い出し仕事への意義を見出すこと、不安定な収入の状況でもいくつかの仕事を同時に持つことで安定した収入を得られるようにすることなど27の実践知が得られた。

【OpenSEA ポスター発表(5)】

水に対する考え方

カンボジアのナーガ信仰と日本の蛇信仰

阿部 一華

(宮城県仙台二華高等学校 2 年)

本研究では水に対する考え方について「蛇信仰」に着目し、それらを比較することで明らかにすることを試みた。文献調査により蛇神ナーガの理解を深めるとともに、インド神話や民話、日本の蛇神信仰についても文献調査を行った。また、2024 年 8 月にカンボジアの農村、漁村に住む住民へインタビューした結果、ナーガの知名度は高いものの、信仰をしているのは水上で生活するごく一部の人のみということが分かった。彼らは水竜巻にその姿を見たと話していた。

それに対して日本の蛇信仰は、その姿から生命力を見出して発展した。その先で農耕の神へと転じると豊かさの象徴ともなり、宇賀神、弁財天と習合を重ねた。これらのことから古代日本人は水に対して、子孫繁栄や財力(米)といった命に関わる印象をもち、弁財天が流入してからは、財力(金)や才能といった豊かな印象を持つと考察した。

【OpenSEA ポスター発表(6)】

アンコールクラウ村でのバイオトイレ運用に向けて

石沢 瑤其、齋藤 万悠子、
佐藤 理乃、新海 晴菜
(宮城県仙台二華高等学校 2 年)

カンボジアのシェムリアップ州、アンコール遺跡周辺の村では、遺跡保護や住民の経済状況の観点から下水道の整備が難しい。そこで、本研究では下水処理を必要としないバイオトイレを現地家庭に導入することで、屋外で排泄している現状の解決とともに排泄物の堆肥化が可能か検討した。

現地で行われている堆肥作りを参考にし、現地で入手可能な米糠、粃殻をバイオトイレの基本の内容物に設定して日本で実験を行った。なお、実験では人糞の代わりに牧場で採取した馬糞を使い、内容物の発酵過程で出る熱、トイレを模したコンポスト内の状況の観察を実施した。その結果、コンポスト内でのカビの発生、土の栄養状態による温度変化、温度上昇における米糠の有用性を確認した。また、同様の実験を 2024 年 8 月にシェムリアップの農村で行い、日本との比較を行った。今後は、病原性大腸菌の死滅を無毒化の基準とし、コンポスト内の更なる温度上昇の条件について検証していく予定である。

【OpenSEA ポスター発表(7)】

古代遺跡の修復について

アンコールワット遺跡群の例から

大河内 すず

(宮城県仙台二華高等学校 2 年)

カンボジア国内には、カンボジア内戦の影響で発見当時から修復されていない遺跡が存在する。カンボジア内戦によって一部破壊されたアンコールワット遺跡群もまた修復の対象となっていたが、他国の協力もあり、状態が大きく改善されつつある。アンコールワット遺跡群の修復を参考に、カンボジア国内の遺跡の保全修復作業を現地の人々が持続的に行うために有効な支援内容を考察した。

文献調査を通して、ポルポト政権による大量虐殺行為や歴史・宗教の否定、内戦の拠点ともなったアンコールワット遺跡群の破壊について知り、保全修復作業における技術移転だけでなく、内戦時代の話題自体をタブーとするカンボジアの歴史教育にも改善の余地があるのではないかと考えた。

参考文献

山田寛，ポルポト革命史～虐殺と破壊の 4 年間，講談社選書メチエ，2004

石澤良昭，アンコール王朝興亡史，NHK ブックス，2021

三浦恵子，アンコール遺産と共に生きる，出版社めこん，2011

古田元夫，東南アジア史 10 講，岩波新書，2021

【OpenSEA ポスター発表(8)】

学力向上を目標とした学校生活の充実
カンボジア農村部の高校における調査より

杉江 知大、横内 聡史
(宮城県仙台二華高等学校 2 年)

本発表では、研究対象としているカンボジアのシェムリアップ州にあるバイヨン高校におけるカンボジア全国一斉卒業試験において、数学と英語の成績が全土平均よりも低いことを改善する方法を検討した。先行研究では、中学 1 年生から 3 年生にかけて体力が向上すると主要 5 科目の最低評定値が向上する(苦手科目の学業成績が向上する)ことが示されており、私たちはバイヨン高校において継続的な運動習慣によって苦手科目の成績が向上するという仮説を立てた。2024 年 8 月に実施した現地でのフィールドワークではアンケートと小テストを行い、アンケートによると生徒達はサークル活動に興味があるということが分かった。今後は、2024 年 12 月に実施予定の現地でのフィールドワークで、運動を継続的にしていた生徒としていなかった生徒で苦手科目の成績の向上があったのかを同レベルの小テストを用いて検証したい。

参考文献

Ishihara Toru *et al.* (2021) “Differential effects of changes in cardiorespiratory fitness on worst- and best- school subjects” *npj Science or Learning*, 6(8)

【OpenSEA ポスター発表(9)】

バイヨン中高における英語教育と遺跡教育について

石森 雄大、原田 笠華、菊地 さらら
(宮城県仙台二華高等学校 2 年)

2014 年から続けている本校におけるこれまでのシェムリアップ州アンコールクラウ村近隣の現地調査から、カンボジアの農村部に位置するバイヨン中高は英語の成績の水準が低いことが分かっている。本研究では、バイヨン中高の英語のスコアが低い原因について、現地でのアンケート調査、カリキュラムの比較、社会的背景の調査によって考察し、その向上策を検討する。英語の能力が向上すれば、遺跡のガイドなどの比較的高収入な職に就いて生活水準を向上させることができると考えられる。

また、生徒のモチベーション向上を目的とし、日本で行われている遺跡教育（修学旅行）や、カンボジアの学校での校外学習の分析を行い、遺跡のガイド人材を育成するための遺跡教育が、現地の学校で導入可能かどうかについて検討する。

参考文献

古田元夫，東南アジア史 10 講，岩波新書，2021

【OpenSEA ポスター発表(10)】

カンボジア農村部におけるマイクロファイナンス利用の実態と認識の世代間格差

尾上 大和、横山 智紀、飯田 樂
(宮城県仙台二華高等学校 2 年)

本校が実施しているカンボジア農村部でのインタビューから、カンボジアの一般家庭における普段の支出において、マイクロファイナンスへの返済が大きな負担になっていることが判明した。しかしながら、その利用の理由の多くは生活に欠かせない大きな出費のためである。そこで、本研究では現地においてマイクロファイナンスを利用するメリットとデメリットを明確に提示することで、それを利用するか否かを正しく判断できるようにすることを目的として検証を行った。2024 年 8 月に実施したアンケートでは、小数の計算において年齢が若い人の方が正答率がよいという結果が得られた。これはポルポト政権時代に教育制度が大きな打撃を受け、年齢が若い人ほど近年になって質が向上してきた教育を受けられるようになったのではないかと考えた。大人の世代は金利の高さ（≒デメリット）を数値としては認識できてはいないのではないかと推測した。この仮説を年収と借金額、最終学歴などから検討する。

【OpenSEA ポスター発表(11)】

バイヨン中学校、高校での成績を生徒の自主的な学習によって改善する方法の探究

蜂谷 芽生、工藤 大知、山路 春
(宮城県仙台二華高等学校 2 年)

カンボジアのシェムリアップ州、アンコールクラウ村にあるバイヨン中高では、教員数が少なく、環境が整わない中での学習が求められている。本研究は、生徒のモチベーションの向上や、予定立てを用いた学習などによって成績を改善することを目指したものである。

先行研究から、数学の成績が比較的良くないこと、算数の計算が不得意な生徒が多くいることがわかっているため、数学の成績を算数の復習によって改善できないかと模索した。このことについて、先行研究や文献調査で現状を調べると共に、現地調査にて予定立てについてのアンケートや算数の小テスト、インタビュー調査を行った。小テストはカンボジアの小6の算数の教科書を参考に作成し、計算問題と図形の問題を出題した。その結果、予定立ての有無と成績の相関関係は見られなかった。算数の小テストにおいては、計算のみならず、図形の公式を忘れていた生徒が多数いたことが判明した。

参考文献

- ・子どもの自立に影響する要因の学際的研究-「子どもの生活と学びに関する親子調査」を用いて-研究成果報告書(2021), SSJ Data Archive Research Paper Series No.77
- ・赤松大輔, 高校生の英語の学習観と学習方略, 学業成績との関連, 教育心理学研究, 2017, 65, 265-280
- ・佐藤純, 学習方略の有効性の認知・コストの認知・好みが学習方略の使用に及ぼす影響, 教育心理学研究, 1998, 46, 367-376
- ・伊藤崇達, 神藤貴昭, 自己効力感, 不安, 自己調整学習方略, 学習の持続性に関する因果モデルの検証, 日本教育工学会論文誌, 2003, 27(4), 377-385
- ・佐藤純, 学習方略に関する因果モデルの検討, 日本教育工学会論文誌, 2024, 28, 29-32
- ・木村友里愛, カンボジア農村部における学校外教育の現状と生徒の成績の関係性, 宮城県仙台二華高等学校 GS 課題研究Ⅱ, 2024 年 3 月
- ・和久田苺杜, バイヨン高校/附属中学校での生徒の数学の成績不良の原因解明, 宮城県仙台二華高等学校 GS 課題研究Ⅱ, 2024 年 3 月

【OpenSEA ポスター発表(12)】

バジョ集落の形成と家族

集落史と系譜の記憶

加藤 久美子

(上智大学アジア文化研究所 客員所員)

バジョ/サマは東南アジア島嶼部海域に拡散居住し、主に海に関わる生業を担ってきた海洋民集団である。移動性の高い集団であり、また多くの他集団出身者がバジョ集落に居住していることから、系譜的な繋がりよりも、共通語であるバジョ語での繋がりが集団を定義すると考えられてきた。彼らが居住する沿岸域は経済的・政治的空白になり易いことから、ハザマを求める人々の集う空間であったことも先行研究によって指摘されている。しかし一方で、親族関係・系譜という概念は人々の日常、居住空間と密接に結びついている。人々は、移動先の集落で予期せぬ親族と出会い、その系譜の広がりを認識し、集落の形成史では「一番初めに来た家族」を記憶している。集落の形成は、先着した者が親族関係者を周囲に住ませることから始まることが多い。ここでは、現地調査で得た成果とともに、居住空間の拡張と家族の広がりという視点からバジョ集落の形成を検討してみたい。

【OpenSEA ポスター発表(13)】

タイの人々とアジア象の関わり
働く動物としての動物福祉

榊 奈都子
(桃谷高校 2 年)

仏教には白象は仏陀の生まれ変わりとする故事があり、国民の 9 割以上が仏教徒のタイでは象は尊ばれる特別な動物です。一方で、タイはアジアで唯一、象に野生動物と使役動物という地位を与えています。象はかつて戦場で王を乗せたり、象使いと一緒に山仕事をしたりしました。現在は宗教行事等で活躍しており、動物福祉の向上が求められています。象を働かせずに特別な保護をしたり、象の世話や扱い方について、新たな規制を設けたりすることが計画されています。仕事を引退した象が暮らすエレファント・キャンプや国立公園では、象に負担が少ないエコツーリズムが増えていることが分かりました。飼育されている象は野生に戻っても自活することができませんが、動物園機構はより多くの野生動物を研究し、繁殖させ、自然の生息地に戻すことを目標としています。このようなタイの人々の象に対する意識や、象を保護する取組が進んでいることについて発表します。

【OpenSEA ポスター発表(14)】

トンレサップ湖西部における水上生活者の実態調査

南 博貴、星 光
(成城高等学校)

メコン川やトンレサップ湖など豊富な水系を有するカンボジアでは、これらの水系から獲れた水産資源が貴重な国民の食糧源となっている。しかし、近年では気候変動やメコン川上流のダムが原因となって水位が減少するという問題が顕在化している。本調査では、カンボジアのメコン川やトンレサップ湖を中心とした水上生活者の、経済状況などの生活実態を明らかにするために水上生活者への聞き取り調査を行った。その結果、同じ地域であっても各世帯に船舶の所有数、家財道具の所有状況などの経済格差が確認された。具体的には、手動の舟しか持たない家庭もあれば、モーター付き船を 4 隻所有している世帯もあり、貧富の差が顕著だった。この結果から、水上生活者の間では経済格差が資産や生活手段の違いとして表れていることがわかる。特に、漁船の所有数や設備は収入に直結するため経済格差がますます深刻になっていくと考えられる。

【OpenSEA ポスター発表(15)】

カンボジアにおける都市周辺と農村部の農民の生活実態

阿部 航太、高村 大幹
(成城高等学校)

本稿は、都市部周辺を中心に発達しているインフォーマルセクターであるウェイトピッカーの実態調査をシェムリアップ市郊外で行った。ウェイトピッカーとは有価物を収集して収入を得る職業で、賃金が高く地域にとどまりながら収入を得られることや、参入障壁等が低いことから調査地域では一種の生業として成立していることが分かった。一方、地方の村では主に農業を生活の軸として営んでいる。このことから、ウェイトピッカーと同じく学歴等の参入障壁が低い職業を比較することにより都市近郊の村との共通点や相違点が顕著に現れると考えられた。調査地域であるシソポンは現在も地雷が多く埋まっている地域であるが、JMAS やコマツなど、日本の団体が地雷撤去や農地開発などの農業支援をしており、農業収入は全体的に増加傾向にある。調査では現地の農民や、支援団体へのインタビュー調査を行い、都市部と農村部を比較することで生活の違いを明らかにした。

【OpenSEA ポスター発表(16)・ライトニングトーク(3)】

インドネシア・東ジャワの村落部における高齢者が紡ぐ人間関係

Bella Rousady
(慶應義塾大学 修士課程)

近年、インドネシア政府は高齢者の社会参加を促進し、「高齢者クラブ」など高齢者の組織化の取り組みがなされている。社会参加を通して人間関係を紡ぐ機会やその重要性が高齢者の孤立を前提に指摘されている(伊藤 2019, 安留 2016 など)。一方で、既に密接なつながりを持ち、孤立を背景としない村落部では、人間関係を紡ぐことが異なる意味や重要性を帯びる可能性がある。本研究は、インドネシア・東ジャワの村落部において高齢者が人間関係を紡ぐ多様な側面を理解し、その意味を明らかにすることを目的とする。フィールドワークを通じて、高齢者が紡ぐ『家族』や『家族以外』との関係、『紡ぐことの障壁』の 3 つの側面から検討し、その意味が家族内での役割維持、情緒的安定、そして社会的評価の保持に関わることを示した。一方で、人間関係を紡ぐ過程には義務感や社会的圧力が動機として働いている側面も存在することが明らかになった。

【OpenSEA ポスター発表(17)】

ミンダナオ・ブハイ村の貧困

長期化する震災避難とバナナプランテーションへの依存

近藤 千咲季

(愛知学院大学 博士前期課程)

私は学部生のときに NGO 法人のミンダナオ子ども図書館を訪れ、5 年も震災避難生活している 19 歳の学生に出会った。2023 年 9 月と 2024 年 8 月に再訪し、彼の家族や役所の方に、避難民への対応や村の労働環境などについて取材した。応急避難所にいる人たちは仮設住宅に移ることを今なお待ち続けているが、政府には、土地を買収し仮設住宅を建てる財源が不足しているという。現在の支援は 1 年に 1 家族 5kg の米の支給のみで、被災者に対する政府の支援の拡充が不可欠である。村の人々はほとんど多国籍企業のバナナ農園で働いている。安定的な収入があり極貧に陥らないのは農園のおかげともいえるが、搾取や農薬の健康被害の問題は見逃せない。一方、村の一部では、ある財団の支援でオーガニックバナナの栽培に取り組んでいる。この発表では、バナナに関わる日本人の課題も指摘しながら、震災避難民および村人が持続可能で自立した生活へと進むための課題と展望について論じる。

【OpenSEA ポスター発表(18)】

「ゴミ」から見る海洋観

インドネシア ラエラエ島民の『聖』と『清』

浦野 里彩

(慶應義塾大学 修士課程)

本研究の調査地ラエラエ島のある南スラウェシ地方社会では、海は死後の靈魂の赴く先かつ新たに誕生する人間の靈魂の由来として極めて神聖な位置を占めてきた。現代でもその価値観は健在であるにもかかわらず、日常生活において最も頻繁に見られる海との関わりは「ゴミ」を海に捨てることである。さらには海に捨てなければならない「ゴミ」さえ存在する。本研究は、一見すると矛盾に見えるこの現実がいかに共存・成立し得るのかとの背景をもとに、ラエラエ島民の海洋観と「ゴミ」を手がかりとした汚穢観への分析から、『清』との比較を通して『聖』とは何かを明らかにする。現在まで汚穢研究、殊にケガレ論の分野においては、近代的産物たる「ゴミ」を「ケガレ」の内に位置づけ語ることはなかった。しかし、現代に生きるリアリティの中でそれをあえて同じレベルで分析し、『聖』と『清』を対置するとの方法を用いることで「ケガレ」理論の発展を試みる。

【OpenSEA ポスター発表(19)・ライトニングトーク(4)】

タイのローカル寺院における信仰対象物とアートの交錯

小川 絵美子

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化
研究所 ジュニア・フェロー)

近年、タイのローカル寺院における固有の信仰対象物や寺院装飾の神獣像が、SNS やメディアを通じてキャラクター化やネット・ミーム化し、観光や商業の文脈で広がる現象が観察される。宗教的な空間であるだけでなく、地域のコミュニティ、教育、観光等、社会の中で様々な役割を担ってきたタイの寺院は、時に風刺やアート表現の場にもなり、経済活動が行われる場でもある。本研究では、このようなローカル寺院から発信される事物を「アート」のひとつとしてとらえ、事例を通じてタイの宗教的伝統とポップカルチャーの相互作用を考察する。SNS やメディアの分析から見えてきたのは、超俗性を保ちつつもエンターテインメント性や収益性を模索する寺院の様相と、それを取り巻く人々の文化的アイデンティティ再構築の動静である。

【OpenSEA ポスター発表(20)】

現代インドネシアにおけるイスラームと音楽の関係性

チェ ジス

(大阪大学外国語学部外国語学科
インドネシア語専攻 4 年)

イスラーム世界では、一般に歌舞音曲は忌避すべきものとされる。しかし、インドネシアでは人口の 90%近くがムスリムであるにもかかわらず、伝統音楽としても、ポップソングとしても、「イスラーム音楽」活動が活発に行われている。インドネシアでどのようなイスラーム音楽活動が行われているかに関する先行研究はすでに存在するが、その中では、それらの音楽活動とイスラームの音楽禁忌の問題については触れられていない。本研究は、インドネシアにおいて音楽とイスラームの関係性はどのように認識されているかを明らかにすることを目的とする。プサントレンで学ぶイスラーム音楽ソラワットと、近年新しく登場したイスラーム系アイドルやパンクロックの音楽について、演奏者へのインタビュー、聴衆へのアンケート、動画分析を使用し、音楽とイスラームの関係性について調査する。

【OpenSEA ポスター発表(21)・ライトニングトーク(5)】

2021 年クーデター以降のミャンマー国民の世論

Facebook を活用した調査から見える市民社会の抵抗

石川 航

(立教大学 博士後期課程)

ミャンマーでは長きにわたって言論統制がなされていたため、民政移管後も国民は政治的なテーマについて意見を論じることには慎重であったとされる。2021 年の軍事クーデター以降、国軍による弾圧が原因で、市民が政治的な立場を示すことはさらに難しくなっていた。そこで本調査では、Facebook で回答者を募り、「政治的志向」「生活・国民意識の変化」「国際社会への要求」という 3 分野に大別される 50 の設問からなるアンケート調査を行うことで、これまで明らかにされにくかった 2021 年クーデター以降のミャンマー国民の世論の傾向を数量的に解明することを試みた。

その結果、ミャンマー市民(3906 名)から回答を得られ、その内の 83.9%がミャンマー国軍による統治を認めない立場であることなどから、多数の国民が民主化の実現を希望していることが分かった。また、78.2%が民主派の武装組織である市民防衛隊 (PDF) を支持するなど、抵抗運動への根強い支持が明らかになった。

【OpenSEA ポスター発表(22)・ライトニングトーク(6)】

仏領期ベトナム女性誌にみる結婚をめぐる議論の一考察
1930 年創刊『婦女時談』の言説分析を通して

新井 悠子

(東京外国語大学 博士後期課程)

本報告は、1930 年にベトナム北部の都市ハノイで創刊された女性誌『婦女時談』の言説分析から、当時の結婚観について検討するものである。

これまで仏領期ベトナムの女性を対象とした研究は、主に階級闘争・民族解放運動史に強く影響を受けていたため、これらの運動に直接関わっていない女性誌は、ベトナム国内で正当な評価を受けにくかった。近年ではジェンダー史の視点から、女性誌の分析がなされるようになってきているものの、『婦女時談』に関する研究は十分ではない。

本報告では、①『婦女時談』の社説の数量分析を通じて、同誌がどのようなテーマに重点を置いていたか明らかにする。②同誌が論じた主要テーマの一つである「家族」に焦点を当て、結婚についての議論を分析する。

【OpenSEA ポスター発表(23)・ライトニングトーク(7)】

ジャカルタの低所得者コミュニティにおける水害レジリエンスと家計貯金

Clément Hennet
(慶應義塾大学経済学部 4 年)

ジャカルタは世界で最も急速に地盤沈下しつつある都市であり、行政による対策は北部に偏るため、南ジャカルタでは住民が独自に対策を講じざるを得ない状況である。

本研究では、南ジャカルタのレンテン・アグン地区で行った被害者やコミュニティ代表者に対する半構造化インタビュー調査に基づき、水害常襲地に住む困窮世帯がリスクと家計貯金にどのように対処しているのかを考察した。また、インタビュー対象者のリスク回避を評価する行動実験も実施し、インドネシア政府の行政データも加味して質的理解を試みた。

これらを通じて以下の点が明らかになった。①住居や支援の格差が拡大し、多くの住民が災害貧困の罠に陥っている ②数年ごとに発生する水害の頻度と日雇い労働者の短期的な貯蓄戦略とのあいだに不一致が生じている ③実験で観察されたリスク追求行動が水害への備えに対する態度に影響を与え、貧困ライン近くにいる住民のリスクテイキング傾向と一致している。

【OpenSEA ポスター発表(24)】

The Spectrum of Moral Education: The Case of Indonesia's Schooling System

Clotilde Pedron, Kei Cho
(Keio University)

Countries in the West have thrived for decades in favor of a secular system, clearly delimiting the public and private sphere. However, in recent years, there has been a resurgence of the conversation of what space religion and morality should take up. This begs the question of what moral education truly is. Moral education would thus act as a spectrum, ranging from religious to civic education.

Indonesia is one of the only countries to include both a secular, a civic as well as a religious aspect to their education system through mandatory teachings of both during the entirety of their schooling. Research was conducted on Sekolah Menengah Pertama (SMP) students in Jakarta through semi-structured interviews and surveys in order to obtain a reflection of the sentiment held towards the two obligatory classes. Additionally, a historical analysis of how both religion and the Pancasila was used in the past by political leaders is provided in order to understand Indonesia's current attitude towards the subject today.

The research highlights the following: (i) SMP students attitudes are stronger towards religion compared to the Pancasila, highlighting differences between individual faith and national identity. (ii) Here, the presence of a religion and a Pancasila class mirroring each other and providing a necessary balance to ensure the cohesion of a multicultural society.

Keywords: moral education, civic education, religious education

【OpenSEA ポスター発表(25)】

より緑豊かな未来に向けたジャカルタの廃棄物管理格差の分析と持続可能な教育の先駆的取り組み

レンテンアグンでの調査研究からの考察

森下 大翔、高木 蓮、反保 好古、
ルイーズ ミュラー
(慶應義塾大学経済学部 3 年)

近年、世界中でプラスチック製品削減とエコフレンドリーな製品の導入が進んでいる。日本のような先進国では、プラスチック廃棄物の排出を減らすためのモデルが示されているが、廃棄物管理が未整備な地域では事情は異なる。インドネシア・南ジャカルタのレンテンアグンは組織的な廃棄物管理の欠如から海洋汚染が発生しており、経済状況や教育水準、生活習慣がエコフレンドリーな対応に悪影響を与えていると考えられる。本研究では、主婦、学生、廃品回収業者の視点から社会的習慣や地域経済の問題を探り、「廃棄物管理問題の主な原因は何か」「教育の変化を踏まえレンテンアグンは今後どうなるか」を考察する。これにより、全国的な廃棄物管理の戦略構築と持続可能な教育の重要性を提唱する。

【OpenSEA ポスター発表(26)・ライトニングトーク(8)】

日本占領下旧オランダ領東インドで生まれた子どもたち

日本、朝鮮半島、台湾出身の父を持つ子どもたちの父親探しと自己認識の変化

溝口 聡美

(同志社大学大学院 博士課程)

本研究は、日本占領下の旧オランダ領東インド（現在のインドネシア共和国）で、日本、朝鮮半島、台湾出身の日本兵および民間人と「現地女性」との間に生まれた子どもたちのライフストーリーに焦点を当てる。これらの子どもたちは数百人から数千人にのぼるとされ、多くはインドネシア独立後、オランダに渡りインドネシア系オランダ人として育った。壮年期に差しかかった頃に父親のルーツを初めて知り、父親探しを試みる者が多かった。現在も、父親や親族を探し続けている人々がいる。オランダで実施したインタビューを通じて、これらの子どもたちが社会的偏見や「知られざる自らの出自」に直面し、自己認識をどう形成していったのかを明らかにする。特に、「敵の子」としての葛藤や、父親の背景を知ることが彼らの自己理解にどう影響したかに焦点を当て、主にオーラル・ヒストリーの手法を用い、植民地主義と戦争が「戦争の落とし子」に与えた影響を再考する。

【OpenSEA ポスター発表(27)】

タイにおける外国籍・無国籍生徒と「進学」
ミャンマーとの国境地域における職業高校を事例に

船橋 唯介

(東京大学大学院 修士課程)

タイの職業高校における外国籍・無国籍生徒の進学戦略を事例研究として考察することが本発表の目的である。タイでは 2000 年代以降、タイ国籍を所持しない児童生徒の学校教育への進学が可能になっている。国内で高等教育を修了することで、国籍取得の可能性が開かれてくることも指摘されている。従来の研究は普通科やノンフォーマル教育を対象としたものが多く、国籍取得のための進学という現象が職業科でどのように展開されているのかを扱っている研究は少ない。

発表者は 2024 年 8～9 月にかけて、ミャンマーとの国境に位置するターク県メーソー郡の職業高校にて約 3 週間のフィールドワークを実施し、生徒や教職員への聞き取りや授業観察を行った。この調査をもとに、本発表ではまず学校教育への進学がタイ国籍取得と結びついている制度的背景を整理する。次に、外国籍・無国籍生徒による国籍を取得するための戦略としての進学の様相を仮説的に提示する。

【OpenSEA ポスター発表(28)・ライトニングトーク(9)】

東南アジアにおける小児医療と健康保険制度の現在
インドネシアの歯科衛生環境の実態を通して

宮浦 智樹

(東京農業大学第一高等学校 3 年)

東南アジアでは小児の健康に関して発育障害が未だに深刻な課題である一方、近年の食生活の多様化に伴い、肥満や糖尿病、腎不全や虫歯といった相反する健康問題が生じている。経済成長の続伸に伴う経済格差の拡大により、医療享受の機会の差も増大している。そこで、東南アジア各国における保険制度を概観したうえで、小児の健康問題の中でも特に幼少期の発症が将来的な健康に影響する口腔衛生に注目し、経済状況による歯科治療における医療格差の内容を明らかにするため、インドネシアにおいて 2023 年 8 月に予備調査、2024 年 8 月にフィールド調査（西ジャワ、中部ジャワ、バリでの聞き取り調査及び保護者へのアンケート調査）を実施した。その結果、1) 農村部と都市部での家庭間経済格差、及び歯科治療が可能な医療機関へのアクセスの差、2) 農村部での医療システムの機能不全、3) 都市部での医療提供体制の先進性が認められた。

【OpenSEA ポスター発表(29)】

**1980 年代の東ドイツにおけるベトナム人労働者の受け入れ
グループリーダー (Gruppenleiter) のレトリックを中心に**

村上 遥香

(大阪公立大学文学研究科
都市文化研究センター 研究員)

これまで、1980 年代の東ドイツ社会に労働者として投入されたベトナム人労働者は、「権威主義的」制度の下で労働に従事したとされてきた。本研究では、ベトナム人労働者を代表する存在であったグループリーダー (Gruppenleiter) に着目し、従来の評価の再検討を試みる。

従来の研究において、グループリーダーは企業から他の労働者の管理を委任される監視者としての側面が取り上げられてきた。しかし彼らは、労働条件への不満や宿舎の環境改善といった労働者の声を代弁し、企業と交渉するなど、二重の役割を担う存在でもあった。交渉の際には「社会主義兄弟国としての友好関係」といった社会主義イデオロギーを巧みに利用し、労働者の利益を確保した。

東ドイツにおける外国人労働者の受け入れ計画は、国家主導の厳格な政策だけではなく、ベトナム人労働者の主体的な抵抗や交渉といった、より複雑な力関係の中で実行されていたのである。

【OpenSEA ポスター発表(30)】

ラオスの日常生活における医療とその背景

山本 育生

(九州大学医学部熱帯学研究会)

これは九州大学医学部熱帯医学研究会の活動の報告である。本活動は、医療的に発達段階であるラオスで、人々が日常的にどのような医療を利用しているのか知ることを目的とした。調査はラオフレンズ小児病院の見学、及び訪問看護への同行を通して行った。

ラオフレンズ小児病院はラオス北部のルアンパバーン県にある。同病院は日本の病院に比べ、外に開放的な病院の造りとなっていた。また、ラオスの慣習や地域的に多い病気に対応するべく我々が見たことがない取り組みもされていた。

また、訪問看護から以下のことがわかった。文化的な背景や物理的な距離も影響し、医療の必要性を感じていない家庭もあるようだ。病気の子どもを世話することが多い祖父母に西洋医学の新しい知識を伝える難しさもある。そして、病院内で赤子をあげる・もらうという現状も知った。

以上の内容について、医療を学ぶ学生が目線で気づいた日本との違い、その背景についてまとめた。

【OpenSEA ポスター発表(31)】

ジャカルタにおけるデジタル決済の普及要因と銀行間競争の影響

加納 大暉、犬井 彩乃、兒玉 龍樹、今井 彩歩
(慶應義塾大学経済学部 3 年)

本研究は、南ジャカルタ市レンテンアグン地区の AR 通りと H 通りにおける QR コード決済の普及状況を調査し、特に銀行間の競争が普及に与える影響について分析することを目的とする。調査では、現地の商店や消費者にインタビューを行い、QR コード決済の導入状況や使用頻度、導入に際しての障害について聞き取りを実施した。

調査の結果、都心部だけでなく郊外においても若年層向けの店舗では QR コード決済が浸透している一方、郊外では現金が依然として主流であった。さらに、この QR コード決済の普及状態の背景には銀行間の競争がある一方で、競争の激化により銀行ごとに異なる料金体系や決済システム自体の問題が生じ、店舗側に複雑さをもたらしていることも明らかになった。

本研究は、インドネシアにおける QR コード決済の普及促進に向けた政策立案や銀行の競争戦略の見直しに示唆を提供するものである。

【OpenSEA ポスター発表(32)】

Universal Healthcare as a National Agenda: The Lived Experiences of Lenteng Agung

尾形 学、鳥海 真、小泉 啓史
(慶應義塾大学経済学部 太田淳研究会)

Since Indonesia introduced their universal healthcare program JKN, abbreviated from Jaminan Kesehatan Nasional, coverage has grown to millions of citizens in the past decade. However, it is understood that the scheme is still in progress. Though the government has emphasized their success with national data, there is a lack of local data collected. This study aims to examine local satisfaction and availability of healthcare through fieldwork conducted in Lenteng Agung, South Jakarta. Findings indicate that primary care is satisfactory. But the study also found that challenges remain in secondary care facilities where poorer patients face discrimination and coverage gaps. This research emphasizes the necessity for targeted policies by the government, suggesting that the government ought to focus not only on the spread of membership, but also the quality of healthcare and the lack of coverage in regions outside of the capital. By improving the JKN in these ways, Indonesia will progress towards a healthcare system that could become a model for Asia, or even the world.